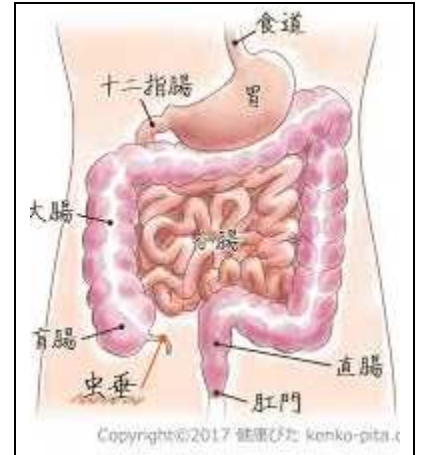


7月8日夕食がどうしても進まない。そのうち鳩尾あたりから、下腹部に痛みがやってきた。2日前、ホームドクターに日頃の服薬剤を頂いた折、血液、小水検査も受けて、異常があれば、連絡があるはずなので、私は一過性の腹痛と思っていた。次の日、クリニックは休み。ホームドクターも当てにならない。けれども腹痛は増す。ベッドに横になりながら夕方まで我慢していたが、検温してみると 38℃になっていた。心配がつのり、急遽近所の総合病院に電話相談し、夫に伴われ、タクシーで夜間診療部に直行。

診察後、血液検査、エコー、レントゲン、CT などを受け、「急性虫垂炎」と診断され、即、入院になってしまった。虫垂に大きい糞石があり、虫垂が3倍ほどに腫れて、炎症を起こしている模様とのこと。糞石とは便が石化したものだという。病棟のベッドにたどり着いたのは夜も更けてのことだった。翌日午前中に、3時間ほど要して、腹腔鏡手術を受けた。炎症が大きく、大腸も一部切除したとのことだった。病室のベッドに帰ったものの、口は酸素マスクで塞がれ、指先には心電図モニター、腕の静脈には抗生剤、痛み止め、輸液などの点滴、下腹部にドレーン、導尿管などが繋がれ、私は雁字搦めになっていた。



その日のことはほとんど記憶にない。翌日身体を起こしてみたものの、動く痛みが強くなり、どうすることもできなかった。主治医は「あの時、悶絶していましたね」と言われた。私は熱には強いけれど、痛みにはとても弱いのだ。禁食が続き、回復に時間がかかると言われ、横になったまま数日を過ごした。



術後5日目、導尿管も抜かれ、昼から食事ができることになった。メニューは重湯、リンゴ葛湯、カロリーバランスジュースだった。重湯の美味しかったこと！私は瑞穂の国の人間なのだとしみじみ感じるほどごはんの香り、味が懐かしく、美味しく、有難かった。重湯を舌のすべてで味わい、満足できた。

虫垂炎は切れば済む病気と思われているけれども、虫垂は無駄に存在している臓器ではなく、善玉菌の備蓄機能を備えているので、欠かせないものとのこと。それを失い、本当に残念である。

私は免疫力がないうえ、高齢となり、重症化し、快復には時間がかかる。病室はカーテンで仕切られていて、他の病人の様子はわからないけれども、看護師が検温などに来る時、病室が騒々しくなって、何か垣間見えることがある。看護師の声にすぐに反応する病人は少なく、「えっ？」と聞き返して、更にボリュームを増して看護師が何度か問いかける、という連続になる。何しろ高齢の患者ばかり。「入れ歯、補聴器、メガネ」が三種の神器のような感がある。また、認知症の病人もいて、頓珍漢な返答が聞こえたりする。どんな病人にも本人確認をしながら、粘り強く、優しく、検査、手当、介護をしてくれる様子がよくわかる。なかなか大変な仕事だと思う。病人はやはり苦しくて横になっているので、眠りは苦痛の代償として与えられているような感じがする。誰でも回復を目指して、忍耐しているのだなあと思わせられる。

病後の夫が私の心配をしてくれて、申し訳ない。老々介護に突入だ。夫は2年前に回盲部に悪性リンパ腫の腫瘍ができ、抗がん剤で破碎し、快復したが、奇しくも同じ場所を私は切除した。夫は記念(?)に糞石を持って帰ったという。9日目に退院し、よたよたと自宅に辿りついた。夫は掃除、洗濯などはしたというが、お嫁ちゃんが毎日お弁当を届けてくれたという。感謝、感謝。バルコニーの花たちも待っていてくれた。糞石も見た。3.3cm位の固い大きい石。なぜ、あなたはそこに隠れていたの？